

フラグメント第3回（2020.9.11記す）

1 サンフランシスコの空が濃煙に沈んだ！（『思考論』）



①今年9月9日。サンフランシスコに住む家人は、朝窓を開けて愕然とした。空が暗いオレンジ色の薄闇に覆われていた（写真参照）。日光は遮られ、市内全域が闇に沈んでいた。一瞬、昼夜が逆転した恐怖に襲われた住民も少なくなかっただろう。その光景はサイエンス・フィクションでおなじみの火星の世界を彷彿とさせた。

②8月半ばに14000を超える落雷が起き、南カルフォルニアで大規模な山火事が発生した。それ以来、火事は北上を続けていたが、サンフランシスコへの影響はほとんどなかった。ところが、一夜にしてサンフランシスコ市街にも山火事の濃煙が張り出した。なぜか？

③実は、日本を襲った台風9号・10号の影響といわれる。

偏西風は北半球の上空を東から西へ吹いている。9月に九州を襲った台風9号・10号が偏西風の流れに影響し、今年の偏西風は米国西部で大きく北へ蛇行した。そのため山間部の山火事の濃煙を都市部の空まで運んでいった。そういわれている。

④九州を北上した台風が、サンフランシスコに濃煙をもたらす。驚くような因果の流れだが、学問的には珍しい話でもない。

「ブラジルで1匹の蝶がはばたくと、テキサスで大竜巻が起るか？」
これがアメリカの気象学者ローレンツの提示した問い合わせであった。

⑤この比喩から生まれた有名なバリエーションがある。「北京で蝶が羽ばたけば、ニューヨークの天気が変わる」

蝶の羽ばたきによるわずかな風が、数ヶ月後に起こるハリケーンの進路に影響を与えるのではないか。最初の小さな変化は、時間と空間を超え、結果として大きな変化をもたらすのではないか。これがカオス研究でいわれる「バタフライ効果」仮説である。

⑥自然是人間にとてまだ未だ未知の存在である。自然の織りなす因果の流れは、人間の予想を超えてはるか彼方に及ぶ。人間は未だ因果の精妙さを知らない。自然の前には赤子同然である。新型コロナは依然未知の存在である。拡大が一時止まったように見えるからといって、侮ってはならない。

2 足元に大変動が起きている（『思考論』）

①仕事場のある山里は、海拔 180 メートル。夏も涼しく昼も夜もエアコンを使ったためしがない。

しかし、異常な暑さにたまらず、数年前から昼夜もエアコンをつけるようになった。エアコンをつけて寝ても、朝おきると 28 度近く、湿度は 75% を超える異常さである。目覚めの爽快感とは全く無縁になった。

メールで熱中症警報がくり返し届く。頭がボーッとしてくる。部屋中のエアコンをかけて 2 時間ちかく。やっと湿度が 70% を切った。しかし、エアコンを止めると、しばらくして 80% 近くまで跳ね上がる。

②野に咲く花にも異常が現れ始めた。ヤマユリもたちまち立ち枯れ、花しょうぶも勢いがない。彼岸花は数日で枯れてしまう。さらには、しゃくなげか 1 年に 2 回も花をつけて驚かされる。花の様子が明らかにおかしい。かつてのように「写り映え」のする花が少なくなって、写真家の妻は苦労している。

③ここ数年、珍しい蝶が近所を飛んでいる。ナガサキアゲハである。妻は「キレイ！」と喜んでいたが、もともとは南方系の蝶類だから異常事態である。蝶の研究家が不安そうに教えてくれた。最近ではこの地方でもツマグロヒヨウモン（秋津マキ子撮影）もよく見るようにになった。この蝶も、地球温暖化に伴って分布域を拡大しているとされる、指標生物である。



④去年はこのあたりでも異常気象の被害がでた。台風 19 号が上陸して避難指示が出るに及んで、たまらず東京に避難した。数日後帰宅すると、屋根瓦が壊れて室内はびしょびしょ、駐車場は根こそぎ倒壊している。

山肌にも大規模な土砂崩れが起きた。丘陵のあちこちに茶色い肌が露われ、杉が数十本まとまって倒れている。いつも見慣れた緑の丘陵に、土石流の跡がむき出しに残っているのも痛々しい。

⑤今年は庭の椎や檜^{なら}の大木が何本か虫にやられた。庭師に聞くと「南方に住んでいたマツクイムシのようなものが北上した」とのこと。彼も最近のことなのでよく知らないという。殺虫剤を撒いてもらったが「老木なのでダメでしょう」とのこと。朽ちた老木は特別の焼却場に運んで燃やすという。お手上げである。長年、緑の木陰を提供してくれただけに残念！

⑥ここ数年「最近の夏はひどいね」と妻と話していたが、「今年が異常なだけで、来年は大丈夫」と漫然と思っていた。珍しい蝶を見て無邪気に喜んでいたが、そんな場合ではなかった。「何か大きな大変なことが起きている」と気づいて、時系列で身近の変化を追ってみた。確かに異常だった。小さなしかし不可逆的変化が、確実に進行していた。自然は恐ろしい予兆を伝えていたのだ。

⑦この変化はもう一時的なものではない。気候はますます激化し、災害は激甚化する。自然は不可逆的な変化を引き起こしている。もう前の世界に戻ることはないだろう。これが来るべき近未来の一つのシナリオである（『プロ弁護士の「勝つ技法』』219 ページ参照）。

3 わたしは自分に甘く他人に辛い（『処世論』）

①わたしは自分に甘い。いや、超甘い。しかし、他人には辛辣である。自分に超甘くて、他人に厳しいから、イヤミな人間である。自分でもそれと分かっているから、図に乗って他人の思惑など気にしない。

②特に詭弁を弄する政治家や偽善者には厳しい。彼らには特有の匂いがあって、わたしはそれをすぐ嗅ぎ分ける。長い職業経験のたまものである。

一介の市民にすぎないわたしは、どう転んでも人畜無害である。ところが、政治家は違う。彼らの転びかたが悪いと、国民の生命・身体・自由・財産に深刻な害悪を与える。詭弁政治家は人畜有害である。それが彼らの拭いがたい本性である。

③かつて文教族の大臣が、道徳の教科化を推進した。ふだん道徳を説いていても、政治献金疑惑が発覚したときの応答は見苦しい。次々と発覚する疑惑に対し、きちんと弁明しないまま、返金したとか、返納したとか、(收支報告書を)訂正したとかいって逃げる。後で返金したからといって、違法なものは違法である。元には戻らない。

キレのよい言動で人気のある若手政治家は、「幽霊会社」へ政治資金を使って高額発注した疑惑を報じられた。この時彼は真っ正面から答えないで逃げ続けた。若気の至りなら、洗いざらいはつきりさせて謝ればよいのである。それもできない器らしい。この一事で、わたしは彼を見限った。

金に絡んでズルをする人物は信用ならない。それがわたしの経験知である。

④こういう政治家たちは、「この程度の金の問題は目くじらを立てるほどではない」「逃げおせれば勝ち。世間はすぐ忘れる」という間違った処世訓を若者に植え付ける。こうしてモラルを害し、社会を劣化させる。政治家への不信は高まるばかりである。

⑤ここ数年、わたしの「ブラックリスト」には、彼らのような人物が満載である。せめての抗議のあかしとして、知人・友人と政治の話に及んだときは、わたしはブラックリスト登載者の言動を歯に衣を着せず批判する。こうして常日ごろ一人だけの「落選運動」をしている。「ごまぬの歯ぎしり」に過ぎないのが残念だが・・・。

4 嫌な感じ (2) (『身辺記』)

①70代半ばになったのに、観念的にまだ死は身近ではない。死ぬのが怖いというより、「嫌な感じ」である。知り合いが倒れていくのを見て、「いつ自分もそうなるかわからない」という、「なんとなく嫌な感じ」である。

②山里での知り合いは、ほとんどが60代から80代のシニアである。たまに会う散歩道で二言三言声を交わす。どこに住んでいるかも、電話番号も知らない。わずかに知っているのは苗字だけ。ほとんど挨拶だけの付き合いである。

③久方ぶりに散歩道で出会うと、配偶者に先立たれたという。そうなると残された1人は、この地で最後まで生を全うするかどうかの決定を迫られる。医療過疎地である。知人も少ない一人暮らしの不安は大きい。家の中で倒れても、誰に知られることもない。

こうして、多くの人はいつの間にか家を引き払っていくくなる。そのことを知るのは、だいぶ

たった後のことである。ひと事ながらわびしい。人間の孤独に身がつまされる。

④「老人本」で語られている老化とか孤独などは、絵空事のような気がする。

有名人の書いた老人本を見ても、「なんかリアルじゃない、嘘っぽい」と感じる。「この年になって売るために派手なキャッチコピーを使うか」と思う。若い編集者が「老年とはこういうものだろう」という思い込みでアイディアを持ち込む。このところ世間からお呼びがかからなくなった著者も、編集者のストーリーに沿って老化を語る。この手の本が多い。何かいかがわしい。

⑤テレビで「あの世はない。死んだら何もない。土に還るだけ」などと著者がのたまわり、若い編集者が感心して聞いていた。いい古された陳腐な考えである。別に目新しいことでも感心することでもない。

5 わたしは仕事に「生きがい」を求めなかつた (『処世論』)

①30代だった頃、小学校から大学まで一緒だった1人の友をなくした。明らかに働きすぎだった。同じ頃、遺族を代理して、働きすぎてなくなった課長の裁判を勝ち取った。

当時はまだ過労死という言葉さえなく、組織のため身を粉にして働くのは美德でさえあった。

しかし、こうした経験を通じて、わたしは日本の労働観について不信感を持った。

②朝早くから満員電車に乗り、1時間半をかけて都心に向かい、大部屋の職場で顔を突き合わせて仕事をする。一日中仕事に追われ、それでも終わらずに遅くまで残業する。まるで働きバチの一生である。弁護士も同じである。むしろ、自由業だけに歯止めがきかない。仕事は尽きることはない。

③こんな労働スタイルは日本人にとっては当たり前でも、欧米ではむしろ例外である。

同じ法律事務所のジュネーブの事務所を訪れたことがある。窓の向こうにレマン湖をのぞみながら、陽のあたるオフィスで仕事をしていた。東京事務所とは大違いだった。

オレゴン州のマンガ・クリエーターを仕事で訪ねたこともある。彼は雑木林の小さな湖のそばに仕事場を持ち、のんびりと(?)仕事をしていた。都会の喧騒とは無縁だった。

ドイツで企業の職場環境については、追想世界ビジネス紀行「ヘルメスベルグの古城にて」で述べた。

④こんな体験を積んだので、わたしは仕事に生きがいを求めなかつた。仕事は他人から与えられるものである。仕事に生きがいを求めて、それは決して満たされる事はない。若いときからそう割り切つた。仕事に不満があつても、ぐつと飲み込んだ。そして、仕事以外に生きがいを求めた。それで何も困ることはなかつた。

⑤自分の生活があつて仕事がある。仕事があつて自分があるわけではない。仕事は生きる手段に過ぎない。それ以上のものでもそれ以下のものでもない。友人が亡くなつてから40年近くたつた。今でも日本では仕事中心のライフスタイルが幅を利かしている。日本人の労働觀は何かおかしい。

⑥70代になつたいま、仕事以外に生きがいをもつたことが本当によかつたと思っている。この年になつても、著作と思索に飽きることがない。ここから得られる達成感は、仕事では決して得ることができない。